

#### 4 表音文字は常に表意化を目指していること

以上のように見て来ますと、「表音文字は、その成立の当初から、「表意」「表語」を目指して使用されていた」と言わざるを得ません。「表音文字」の「表音」は、表意のための止むを得ない手段に過ぎなかったのです。

表音文字にできることは、言葉の持つ“音声”を表すということしかありません。だから、言葉の持つ“音声”を表すことにより、その“音声”によって想起される“言葉”により、その言葉の持つ“意味”を、読み手に伝達する、というわけです。

ですから、「同音異義」の言葉を表記した場合には、どうしても円滑な伝達は困難になります。例えば、国語の表記で言えば、かなで“はな”と書いた場合、漢字のように“花”“鼻”“湊”のような“表語”ができず、思想の伝達に支障が生じます。

この点においては、同じ表音文字でも、かなよりは長い表記の歴史を持つアルファベットを使用している西欧諸国の方が、「表音文字の表意化」を見事に進ませています。

{ cite	{ cent	{ so	{ saw
{ site	{ sent	{ sow	{ soar
{ sight	{ scent	{ sew	{ sore
{ rain	{ rite	{ raise	{ for
{ rein	{ right	{ rays	{ fore
{ reign	{ write	{ raze	{ four

このような例は、一々枚挙に暇がないほど沢山あります。これらは、すべて、欧米人の“表音文字の表意化”の努力の足跡とすることができます。

同じ発音の言葉を、その意味の違いによって書き分けることは、表語文字である漢字では容易ですが、表音文字では容易なことではありません。

大変なことではありますが、文字の目的が“表意”である以上、表意性を高めるための努力、つまり、“同音異義”語の書き分けに努めることが大切です。

そこで、“表意”の目的のために“表音”が犠牲にされ、“表音文字”が“表音的”でないという矛盾を余儀なくされているのです。しかし、こ

れによって、文字としての機能が著しく高められている事実を、私たちは見落してはならないと思います。

ところが、前項の終りでも触れましたが、ムーアハウスは、「表音文字の表意化」を、表音文字の墮落であり、退歩であると見ています。それで、彼は、発音とかけ離れた綴りは、改める方が良いのに決っている、と言っています。

また、人々が、発音とかけ離れた綴りを変えたがらないことについては、彼は、「語源上の理由」と、「綴りを改めることによって、新しい綴りを学習しなければならぬ面倒さ」を挙げています。

ムーアハウスのこの考え方は、西欧諸国のいずれにもあって、それがたびたび“綴字改革運動”を惹き起しています。ムーアハウスを初めとする、これらの人々は、“表音文字”を、文字通り“表音”を目的とする文字であると見ているのです。

“表音”が手段であることに気づかず、文字通り“目的”と見たために、発音とかけ離れた綴りを、表音文字の墮落と見たわけです。“表音文字”が“表音的”でなくて、何のための表音文字ぞや、というわけです。

この考え方の誤りは、“表音文字”を“表意文字”に対立させ、表意文字の発展の上にこれを置こうとしたところに始っています。表意文字にない“表音”という新しい任務を持って生れて来た文字だと考えるものですが“表音”を目的と見ないわけにはいかないのです。

その結果、“表音文字の発展”である“表音文字の表意化”を、発展と見ることができず、逆に“退歩”と見ることになってしまったのです。

ムーアハウスに限らず、人類の意義ある歩みを、簡単に“退歩”だと軽蔑する者が世の中には少なくありませんが、それは、そこに人類の知恵を見出す知恵が足りないためである場合が多いのではないのでしょうか。

人類の歩みには、一見無意味に見えるものもあるでしょうが、深く考えてみれば、多くの場合、大きな意味がきっとあるに違いないのです。

近年、アメリカの言語学界で、“教祖的存在”になっていると言われる、ノアム・チョムスキー氏は、先年、来日した時に、次のように語っています。

「十年ほど前なら、言語学者の 99%は、こう言ったでしょう。もし古

い方式をやめてやり直ししてよいならば、英語の伝統的な綴字法を改めて、音韻表記、発音通りの綴字法を採用すべきだ、と。しかし、そんなことをしたら、大変なことになるところでした。なぜなら、実際に提案されたであろう“音韻的綴字法”というようなものは、普通の正書法(伝統的綴字法)とは、比較にならないほど用いにくいものであることが、今は、英語のフォノロジーの研究の結果によって明らかに示されるからです。」(「朝日ジャーナル」vol.8 NO. 40)

ムーアハウスが、「私たちの救済(伝統的綴字法を廃止して、表音的綴字法を採用することを指す)は、アメリカ合衆国から来そうな気配が一番強い。この国では、書法の伝統が、それほど重くのしかかってはいないからである」と言ったのは、1946年のことでした。

然し、その予想は、20 余年後の今日では、全く覆されてしまいました。チョムスキー氏は、次のように語っています。

「英語の正書法(伝統的綴字法)は、多分字を読むことによって、文を理解しようとする人々のために出来ているのです。それに対して、発音的綴字法は、意味を理解しようがしまいが、聞いたことをただ再生するために出来ているでしょう。」

表音的表記法と、伝統的表記法との違いを、実に見事に執えていると思います。“表音文字の表意化”という人類の知恵が、長い間、見落されていて、やっと、チョムスキー氏によって発見されたような気がします。

これを要するに、“表語文字”が、文字の理想像です。アメリカでも、自ら創作する文字は“\$”“£”など、明らかに“表語文字”ということができます。

自ら文字を創作することができなかった西欧諸民族は、止むを得ない代用品である“表音文字”を、長い年月かけて“表意化”し、“表語文字化”して来たのです。それは、現在においても変りなく、いや、ますますその“表語文字化”に努めることでしょう。

その例は、表語・表意的な“記号”“略語”が、近年、特に増加していることです。先に挙げた“\$”“£”などは、漢字の“円”“銭”と全く同じ働きをしていますし、“a.m.”(forenoon)“p.m.”(afternoon)などの略語も、漢字の“午前”“午後”の働きをしていて、“表語文字”的效果を発揮しています。この略語の数は、私の古い英和辞典に収められているものだけでも、約三千語あります。

今、世界中に広まりつつある“国際絵画文字(アイソタイプ)”は、そのヒントは、漢字から得て作られたものだと言われますが、これも一種の“表語文字”だと言うことができます。

世界の共通語として誕生したエスペラントよりも、強烈な“表意性”により、容易に世界のだれにも理解されるので、各国の文字を越えて世界の人々が共通に使用できることに大きな期待を寄せている人が多いようです。“表語化”“表現化”こそ、文字の理想像であり、世界の文字は皆それを求めている、と断ずることができると思います。